

まちづくり ひろしま

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

第3号(平成25年1月15日)

読者数：341名(募集中)

メールアドレス：hirosima.idea.c@urban.jp

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二

配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

□巻頭言

比治山への思い

中国・地域づくり交流会会長、元広島市長
平岡 敬

このところ、広島市の都市づくりの話題は、もっぱら跡地利用の話である。市民球場跡地、広島大学跡地、西飛行場跡地等々、甲論乙駁、様々な案が出されている。それはそれで大きな問題だが、私の関心は別のところにある。

戦後、広島市の都市づくりの歴史をたどる時、私たちが忘れてはならない地域がある。それは比治山である。海拔71mの小山は、豊かな緑に覆われ、市民の心身を癒す存在である。

原爆被爆の時、この山のお蔭で、東側の街並みは被災を免れた。それゆえ、戦後は街区の老朽化が目立ち、区画整理事業の対象となって、現在も事業が進行中である。

昭和23年半ば頃、米軍将校が広島市役所にやってきて、「ABCC(Atomic Bomb Casualty Commission)の敷地を提供してほしい」と言った。ABCCは、米国が原爆の人体への影響を調べるために設けた機関である。

原爆症に苦しむ市民の姿を見てきた浜井信三市長は、そのような研究調査機関が出来るのは望ましいと考え、小姓町(現在の家庭裁判所付近)を候補地として、準備に入った。

ところが、米側は「広島はときどき洪水があると聞いた。土地の高いところに変更してほしい」と要求してきた。浜井市長は「比治山は市民にとっては一種の聖地である。北には御便殿、南には元陸軍墓地がある。どちらを占領しても、市民は不快感を抱くだろう」と反論した。市民の協力が無ければ、この調査は出来ないと思っていたからである。

その年の暮れになって、GHQのサムス准将から「ABCCに比治山を明け渡せ」と言ってきた。占領下であり、浜井市長は「威圧を感じた」と書き残している(『原爆市長』朝日新聞社刊)。さらにABCC当局は、研究期間は25年くらいの予定で、そのあと施設は全部市か日本政府に譲ると言っていた。

ところで、広島市の基本計画では、比治山を芸術公園と位置づけている。現在は現代美術館、まんが図書館ができていますが、計画では放射線影響研究所(元ABCC)の所在地に博物館を建設する予定である。

この博物館には、広島の特徴である移民の歴史を振り返る展示をするため、80年代に海外の移住者から多くの資料を提供してもらった。トランク、ミシン、アイロンといった生活用品など、移住者の苦闘を偲ばせるもので、今は倉庫に眠っている。

私が市長時代、ハワイやロサンゼルスを訪れた折、日系人から度々「博物館はどうなったか？」と聞かれたものである。財政的理由で建設が遅れている、と弁解してきたが、最大の難関は放影研の移転問題であった。

80年代の終わりごろから、市は放影研の移転を米側と折衝してきた。移転候補地は広島工学部跡地で、健康科学館の隣接地である。

私が市長に就任してからも、米エネルギー省を訪れて移転を要望したり、種々のルートを通じてこの問題を動かそうとしたりした。

92年ごろ、移転補償費の積み増しなどして、ほぼ合意するところまで来た。しかし、93年に米

大統領に就任したクリントンは「双子の赤字」解消のため、すべての事業をストップし、移転話も凍結された。その後、何度か移設を働きかけてきたが、残念ながら実現しなかった。

もともと放影研は日米共同運営とはいえ、米エネルギー省所管の機関である。エネルギー省は核兵器を開発しているだけに、広島市民はその性格に釈然としない思いを抱いてきた。浜井市長が米国の威圧のもとに比治山への設置を認めたいきさつを考える時、戦後 67 年経ったいま、放影研は市の基本計画に従って山を下りる時ではないか。さらに市民の協力によって得られた資料ゆえ、その全面公開、活用を図るべきであろう。

基地問題をはじめ、米国の占領状態が続いている日本で、放影研問題の解決は、広島が広島を取り戻す契機になると同時に、移民資料を寄せた海外移住者の期待に応える道だと思っている。

ひろしまのまちづくりの動き

○広島駅南口Bブロックの再開発がスタート！

昨年末からBブロックの解体が始まった。春には本体工事に着手し、2016年3月末の完成予定である。再開発ビルの概要は以下の通り

- ・西棟：地上52階地下2階建、
入居はビックカメラ（地下2階～地上3階）
事務所（4～7階）、ホテル（10.11階）、住宅（12～52階）
- ・東棟：地上10階地下1階建
入居は店舗（1.2階）、駐輪場（地下1階）、
駐車場（3～10階）
- ・延床面積：約124,800㎡
- ・総事業費：約353億円

広島駅南口Bブロックの市街地再開発事業は1988年に都市計画決定されたが、バブル崩壊後の経済低迷で百貨店やホテルの出店計画がとん挫していた。1992年に再開発組合の設立が認可されて20年、やっと動き始めて組合員も感慨一入であろう。

これで広島の玄関口はふさわしい環境に一步前進する。隣接するCブロックも着工に向けた動きが本格化している。広島駅北口の二葉の里地区の再開発事業もすでに県の放射線治療施設と地場流通大手イズミの進出が決定し、残る国有地の売却手続きも進められる予定である。

さらに、広島駅南口と新幹線口をつなぐ広島駅自由通路の整備がスタートし、2017年度に完成予定で、駅周辺の回遊性の向上が期待される。

また、広島電鉄の新路線「駅前大橋線」の広島駅南口への乗り入れ方法と南口広場の再整備計画も検討されている。

政令指定都市広島の玄関口として肩身の狭かった広島駅周辺も都心の顔として復権しつつある。これからも広島のまちづくりの核として目が離せない。



全景（2011.11撮影）



位置図



完成予想図

（広島市のHPより転載）

○旧広島市民球場跡地委員会（第6回）が開かれた！

・これまでの動き

これまで跡地委員会が5回開催され、相応しい機能として、【文化・芸術機能】、【緑地広場機能】、【スポーツ複合型機能】の3つに絞り込む。市が3案のイメージ図と概算事業費を作成し、絞り込むこととなる。

・第6回跡地委員会

昨年11月30日、跡地委員会が開催され、市事務局で作成したイメージ図6案が提示された。委員から各案に対して意見や感想等を述べ合ったが、意見が集約されることもなく、次回委員会で継続審議となる。



第6回跡地委員会傍聴
(2012年11月30日)

傍聴しての感想：前田洋枝（南山大学講師）

『跡地問題で熟議を生む可能性を考える』

筆者は、ドイツの市民参加の方法を手本にした「跡地創造 101 人委員会」を広島市民有志の実行委員会で企画した。(本来はこうした場を跡地委員会や市に主催していただきたい。)市民参加でまちの将来を考える会議の実施や、その会議成果をより多くの人に伝え、さらに対話の場を作り出そうとする試みに多少なりとも関わってきた経験から言えば、本気で市や跡地委員会が市民の多様な意見を集め、旧広島市民球場跡地の利用について考えたいなら、「何かもっと生かせないか？」という目で今の跡地委員会を見れば、まだまだであると伝えたい。

熟慮された意見を集めるために「小道具を生かす」

自身と異なる立場・考えの人と意見交換する機会は実は普段は多くない。パブリックコメントで寄せられる意見は、多様な視点での検討を経たものはあまり多くないかもしれない。

しかし、例えば、各案の説明とさまざまな立場の委員の発言という(せっかくの！?)「多様な視点からの情報提供」を受けた傍聴者の意見や感想は貴重ではないか？ワークショップや講演会などならごく普通に参加者や聴衆に配布される「感想用紙」を配布しない手はない。

また、今回の跡地委員会での「各案の長所・短所を考える」という討議方法も、跡地委員会の議論にとどめず、市民に開くことが考えられる。「4案の評価記入シート」(あるいは他の案を加筆できるように4案+オリジナルの評価記入シート)を他の資料と一緒にネット上で公開して意見募集のフォーマットにしたらどうか。市民は、さまざまな案を比較検討するステップを経て意見を寄せることで、自分が支持する案と異なる案についても考慮する機会ができる。市や跡地委員会としても、市民から寄せられた意見の検討を深めやすくなるだろう。

熟議が生まれうる「機会を生かす」

おりしも今回と次回の委員会の間には年末年始を挟んだ。「ひろしま市民と市政」に評価記入シートと各案の概要(および詳細情報の URL など)を掲載し、「お正月の家族・親戚団らんで、広島のみちが将来どのようになってほしいか、旧広島市民球場跡地がどのように活用されたら、若者にもその他の年代にも魅力的な街になりそうか、話をしてほしい、話した結果の評価シートを市役所にメール・ファックスなどで送付を」と市民に呼び掛けることもできただろう。普段広島を離れている人々が広島に戻る年末年始やお盆は、広島に住み続けている人々と、広島をよく知りつつ他都市を比較しての意見をもつ人々が、多様な世代のいる場で意見を交換できる貴重な機会と言える。小さな熟議がそこそこで生まれうる。

上記の案は例に過ぎない。このように、討議でよく使われるたった1枚の作業シートからさえ、市民全体での議論につなげることも可能だ。跡地委員会の議論にも、市民の議論を促すことにも、1つ1つの討議の方法や小道具が持つ力をしっかり生かしてもらいたい。

願いは1つ。跡地利用計画作りに市民の熟議を！

○錦織亮雄氏の「時代を語り建築を語る会」

- ・主催 時代を語り建築を語る会実行委員会
- ・開催日 2012年12月1日(土)
- ・会場 広島YMCA国際文化センター本館
- ・参加者 40人

錦織氏の略歴

- ・1937年、広島県生まれ
 - ・1966年、都市建築研究所設立
 - ・1996-2000年、日本建築家協会中国支部長
- 現在、広島県建築士会会長、新広島設計代表

被爆後、戦後の広島の復興を担った建築家の第一世代を引き継ぎ、展開した第二世代の代表的存在である錦織氏から、第一世代との関わり、第2世代としての取組、次世代への提言等を語ってもらい、広島の建築の歴史を検証することを主旨とする。



<話の概要>

- 錦織氏が半生を振り返りながら、自らの建築遍歴を語る。以下、要点を記す。
- ・被爆体験を原点として、戦後復興期の広島の風景は、野っ原に寝そべて夢を語り、道路は子供の遊び場で活気があり、平和祈念式典も真に迫るものがあった。基町の応急住宅や河岸の違法建築の中にもバーのような賑わいの場があった。
 - ・昭和36年に河内設計に入社した頃は、満州からの帰国者と共に設計していた。多忙な中でも、朝はコーヒーを飲みながら建築談議に花を咲かせ、技術の研鑽に励んでいた。東京分室時代には黒川紀章、浅田孝、大高正人等の若手建築家と集い、刺激を受けた。
 - ・当時は市内に6社程度の設計事務所しかなく、お互いの内情を熟知していた。その頃は役所の方が設計事務所の手伝いをして、大らかな時代である。
 - ・暁設計の広島農協ビルや市民病院は日本でも先端を行っていた。河内氏の猿猴川再開設計画や広島湾淡水化計画を紹介。
 - ・昭和39年に河内設計を退社し、日本地域開発機構の立上げに参画したが、昭和41年に河内事務所千田分室を経て、自分の事務所を開設する。処女作「森元邸」、「せとうち苑」、イランやクエートの海外の団地計画等を紹介。
 - ・広島まで新幹線が延びると東京の事務所が進出し、対抗するため昭和45年に広島県設計連合が設立される。第1世代は専業主体の広島県建築士事務所協会を主張したが、昭和55年ごろ専業・兼業別なく入会できる組織になり、設計専業60社からゼネコン設計部等の兼業を含む300社に増える。
 - ・河内氏からの継承は？河内氏は中村順平（エコール・デ・ボザール派）に師事し、西洋的な建築家を志向したのに対して、多様な職能と協働し、統括する立場をとる。
 - ・次世代へのメッセージは？昔は曖昧な責任の良さがあったが、今は責任の追及が厳しく、チェックやマニュアルの時代になった。役所とも発注者と受注者の関係で閉塞感がある。もう少し昔の良さを見直しては？
 - ・都市と建築のあるべき関係は？美しい街は個々の建築を誠実に作った結果、生まれる。

猿猴川再開設計画の説明

コメント

戦後の社会の世相や建築界の雰囲気を知ることができ、大変興味深かった。

錦織氏は河内氏の薫陶を受けた結果、反面教師として別の建築家像を求めている。私は河内氏とまったく面識がないが、河内氏は自分を大衆文学、丹下氏を純文学と称したという。広島の改造計画案を世に問うたが、これも丹下氏の「東京計画1960」や菊竹氏の「海上都市」に呼応する。同年生まれの丹下氏にライバル心を燃やしたが、「広島の丹下」になれなかったのは建築のメディアを持たなかったからか？

今回、河内氏の改造計画案の話聞き、感化されるものがある。建築家はまちづくりに積極的に関与すべきであり、市民に夢と希望を与えるような提案をして、市民とともに議論をすべきではないか。(自戒を込めて)

(瀧口信二)

○昨年のアイデアコンペの中から提案！

当面、2011年に行った広島市中央公園アイデアコンペの提案作品の中から市民の多くが良いとした案を紹介していく。

- ・優秀賞作品番号16（タイトル「TWO LAYER FOREST」）



上：人工地盤上のイメージ



右：地上のイメージ

中央公園全体を一枚の起伏を持った人工地盤で覆い、人と車を分離し、開放的な緑の丘を提案している。既存の文化施設は建替え時期に合わせて低層化・地下化し、人工地盤に統合されて、公園全体が文化を継承する「市民の森」となる。

一枚の人工地盤を浮かせるというアイデアが新鮮で、緑豊かな広場のイメージが好印象を与えたと思う。人工地盤と地上により面積が2倍になるのも魅力だが、果たして地上面が快適な空間になるのか疑問が残る。

広島は地下空間を作るのに不向きと言われているので、人工地盤を適当に組み合わせることはこれからのまちづくりに有効と思う。

受賞者のコメント

受賞者は大手ゼネコンの設計部のためコメントを辞退。

○紹介 まちづくり関連の団体とその動き

広島の町を良くしようと日々努力している人たちの応援するために、まちづくりに寄与している団体等を紹介していきたい。

・ひろしまジン大学の紹介

ひろしまジン大学は2010年5月に開校した生涯学習、街づくりを主な目的とした特定非営利活動法人です。

「広島」全域をまるごと「大学」に見立て、そこに暮らす人みんなが「先生」であり、みんなが「学生」というコンセプトで取り組んでいます。

これまで、「本通り商店街の歴史を学ぶ」、「県北の雪山体験」、「正しい広島弁講座」、「街のユニバーサルデザインを探る」など、広島の歴史、自然、文化、社会課題などをコンテンツとしたオリジナリティ溢れる「授業」を毎月開催。

地域に根差した各分野のエキスパートを先生に迎え、広島の様々な場所で、人と人、人と街、人と地域の絆を深め、広島の魅力を再発見する事業を進めています。

開校後、約2年半で実施した授業は約140コマ。学生登録者は20代～30代を中心に1,600名を越えました。

入学、授業は原則無料。ホームページで学生登録頂くとどなたでも自由に授業に参加できます。

▼ホームページ：<http://hirojin.univnet.jp>

(※学校教育法上で定められた正規の大学ではありません)

広島をまるごとキャンパスとして、誰もが先生や学生になれるという発想がユニークだ。学長を中心に若い人たちが頑張っている姿は頼もしい。



パンフレット



授業の状況

(ひろしまジン大学HPより)

□ほっとコーナー 『わがままを言おう』

通谷 章

私は長く文章の仕事に関わっている。随筆であったり、エッセイであったり、人様のゴーストライต์であったり、むろん商業的な文章もたくさん書いてきた。

その割には、意味不詳の文章も多々ある。能力不足、勉強不足、人生の選択ミスと原因はいろいろ。仕事選びに失敗したなど思うが、取り返しはつかない。だらだらと続けるだけである。

文章は最初の一行が難しい。書き出し次第で次の行を読んでもらえるかどうかが決まる。俗に言う「掴み」である。

街づくりも似た匂いを持つ。駅に降り立った瞬間、その都市ならではの空気を感じる。面白そうな街だな、暮らし良さそうな街だなといった塩梅(あんばい)である。

広島はどうだろう。慣れきったせいもあるが、私にとって退屈な街である。もう「掴み」を覚えない。会話もなくなった「古女房ここにあり」といった感じである。要は安心ではあるが、物足りなさばかりが先走っていく。

街を語れば、魅力探しに尽きる。魅力の一つに変化がある。どんな美人も毎日見ると飽きが出る、その論法である。

では、古女房にオサラバして若い別の女性を探すのか。刺激を与えてくれる女性を求めるのか。これにはちと勇気と予算がかかる。まして倫理的な側面も気持ちを萎縮させる。

女性を街に置き換えてみれば、多分、面白そうなものを建設する、どこそこを開発する、あるいは企業誘致を行うなどの表現が近いのかも知れない。にしても不可欠は先立つもの。

何がしかのお金は必要となる。さらには法的クリアなど、手がけていく段階で種々の困難さえ待ち受けている。

そうなると、このままでいいや。別にすぐに死ぬわけじゃないし…と自分を慰めるしかない。そんな会話をこの広島で延々と繰り返した記憶がある。みなさんは、どうだろうか。

街も人物同様に採点の対象にしやすい。広島は何点ぐらいの評価になるのか？

文化、芸術、スポーツ…もろもろを加味すると、まあまあ。採点すれば八十点ぐらいが妥当か。ただし、私の採点はもっと低い。欲望と願望が強いからである。

ことわっておく。私は、大変に「わがまま」な人間である。

さて、欲望と願望は街づくりに欠かせない。欲望と願望は平たく言うと「わがまま」である。「わがまま」は現状への不満と打破への原動力となり、同時に進化の可能性を併せ持つ。一見穏やかであっても、この両面を燻(くすぶ)らせながら街は動いている。

新年が始まった。そしてすぐに今年も終る。多分、そうだ。一日は長くとも、一年は短い。それとて年明けは、何らかの期待感もある。

今年の年の瀬に、刺激的な一年だったと思えるには「わがまま」がどれだけ街に反映されたかではなかろうか。

「あなたも、わがままをどうぞ一緒に、広島に！」 怠惰で動く気のない私の新年の一声がこれである。

□むすび

新年を迎え、気持ちも新たに元気を出していこう。政権が交代し、取り巻く厳しい環境の中、新たに船出する日本丸を沈没させるわけにはいかない。広島も被爆100年に向けて少しずつ良くなる予感がする。役所任せではなく、市民も一緒になって実現させよう。

(瀧口信二)